

Girl's Project プラン一般プロジェクト 緊急・復興支援 報告書

子どもと楽く、未来のしくみ



Autumn 2013

2012年7月 — 2013年6月



Girl's Project

ベナン「養鶏による収入増加」

背景

ベナンでは、女の子は男の子よりも教育を受ける権利などの基本的な人権を奪われ、社会的に自立する道も閉ざされています。農村地域ではその傾向が強く、家事労働の担い手として働くかされます。公式教育の機会を奪われた女の子の職業訓練や非公式教育といった支援も整っておらず、経済的支援を受けた男性から性的な虐待を受けるケースもあります。

主な活動内容

- 養鶏に関する基本トレーニング(150人)
- 鶏舎設置と家禽の支給(150人、1,650羽)
- 預金貸付協同組合の立ち上げ(15グループ)
- リーダーシップトレーニング(150人)

プロジェクトの対象者には、地域の人々が作成した推薦リストを元に条件を満たす女の子たち150人が選ばれ、2週間のトレーニングを行いました。その後、女の子たちは家族の協力を得て鶏舎を建設し、ひとり雄1羽、雌10羽ずつを受け取り、飼育始めました。



鶏を受け取り嬉しそうな女子

Staff's voice
担当職員より
馬野裕朗 職員
(プログラム部マネジャー)

プロジェクト開始から1年後の2013年9月、対象村のひとつを訪れました。女の子たちが管理する養鶏舎には、ものすごい数に増えた大小さまざまひよこが走り回っており、衛生面に配慮し、丁寧に管理されて育てられていることが見てとれました。

彼女たちは村ごとに10人が1グループとなり、地元NGOのサポートを受けながら「預金貸付協同組合」を作り、運営しています。わずかな額であっても10人集まればそれなりのお金になり、貯

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／クッフォ県、アタコラ県
対象／150人



トレーニングを受ける女子とトレーナー(左端)

case study

クリスティーンさん (17歳)

同プロジェクトでは、飼育過程だけでなく、女の子が自力で鶏の売り上げを管理できるよう「預金貸付協同組合」を立ち上げ、養鶏事業を通じて自分の可能性を広げてもらうためのリーダーシップトレーニングも実施。女の子たちは、「リーダーシップとは何か」「リーダーの役割」「リーダーに必要なスキルや資質」「リーダーシップのかたち」といった事柄に関する理解を深めました。

以前は、学校へ行っていない女子や結婚せずに子どもを産み育てている女子たちは、家族や地域から一段低く見られることもあり、自分自身に自信を持つことができていました。しかし、専門性の高いトレーニングを受けた現在は、地域の人々が女子たちに養鶏について教えを乞うようになりました。

養鶏の成功を通じて自分自身の能力を見直し、自活能力とともに自信をも備えることができたことは大きな成果です。さらに、女子同士が団結しながら、養鶏技術を高めようとする姿勢も多く見られました。

「村で尊敬される存在になれたことを、プランやトレーニングをしてくれたNGO、そして神様に感謝します。もしこのプロジェクトに参加していなかったら、今頃結婚していたでしょう。クッフォ県で一番上手に鶏を育てることができると自信がつきました。友だちにも、努力次第でより良い人生が送れると励ましたいです。

うという心構えが生まれたのです。

このように、自立し、自信を持った女性を輩出することが家族の生計や地域の貧困の改善に大きく貢献することは、疑いないと言えるでしょう。家族の支えもまた、彼女たちの活動を後押ししています。



プロジェクトに参加した子どもたちと(後列中央)

Girl's Project

ベトナム「女性ならではの職業訓練」

背景

経済成長とともに格差が深刻化するベトナム。特に10代後半から20代の若年層は、低学歴や技能不足のため雇用機会に恵まれず、貧困から抜け出しができづらいです。特に女性は、性的搾取、薬物、犯罪などに巻き込まれやすく、社会の中でも非常に弱い立場にあります。職業訓練の機会があっても、夜間に働いて身体を壊し、経済的理由で訓練を修了できない女性もいるため、それを見越した支援が必要です。

主な活動内容

- 5ヶ月間の美容コース(ヘア&メイク)
- 美容コースと既存の職業訓練コースで学ぶ訓練生への奨学金の支給(608人)

実施期間／2012年7月～2013年12月
実施地域／北部(ハノイ、ハイズオン、バクニン)、中部(フエ、ダナン、ホイアン、タムキー、クアンビン)
対象／16歳から30歳の女性608人



ヘアカットの練習をする研修生

参加者の声

テブさん
(美容コースの第2期生)



「私の家は父親がガンになってしまったため、母親が農業をして生計を立てています。きょうだいは6人。私は小学校低学年で学校を辞めなくてはならなかつたのですが、今はこの職業訓練センターで読み書きと基礎的な算数を学んでいます。美容の仕事は気に入っています。美容以外にもライフスキル教育を受けたことで、人とコミュニケーション方法に自信をもてるようになりました」



実技演習に励む女子たち

美容コースは高い専門技術を必要とするため、パートナー団体を探すことが困難でしたが、実績と評価を兼ね備え、さらに社会貢献への関心が高い技術指導パートナー団体を見つけることが出来ました。訓練生として選ばれたのは、いずれも貧困ライン以下の生活を送っている女性たち。



「研修はとても楽しいです！」

技術指導だけでなく、ライフスキル教育(コミュニケーション能力、健全な対人関係を構築する能力、意思決定能力など)も実施し、最終的に37人がコースを修了しました。修了生は接客マナーや職場トラブル解決方法などについても学び、卒業生たちの集まりや、福祉施設での無料ヘアカットの実施や交流など、多くの体験を通じて仲間を作ることができました。現在、美容コースの修了生の約8割が、ベトナム政府が定めた最低賃金の月110ドルを上回る、月収約130ドル～140ドル、あるいはそれ以上の収入を得ています。

訓練生は職業訓練の授業料と教材費を免除されているものの、それ以外は自己負担のため、美容コースと既存のコースで学ぶ608人に対して、生活費や昼食費として奨学金を支給。訓練が受けられるよう支援しました。さらに2013年12月までには、奨学金支給を続けて、より多くの訓練生を支援する予定です。

Staff's voice
担当職員より
深瀬泰子 職員
(コミュニケーション部)

2013年の5月末に、ハノイで実施されている「女性ならではの職業訓練プロジェクト」を視察しました。職業訓練センターのある場所はお世辞にも良い環境とは言い難いのですが、「生徒たちが通いやすい場所を優先した」とは校長の弁。校長自身も組織立ち上げ時のボランティアで、企業での仕事を経て職業訓練センターへ戻ってきた女性です。

ヘア&メイクとネイルコースの各教室では、女子たちが実技練習に励んでいました。支援で支給された真っ白な制服に身を包み、カメラを向けると少しばかりながらも明るく生き生きとした笑顔で応えてくれます。親の失業や死亡で経済的基盤を失い、学校教育も半ばに大都市で仕事を探す女子たち。

職業訓練センターでは、そうした切実に支援を必要としている人に届くよう、入学者は面接だけでなく家庭訪問をし、経済事情や環境も確認したうえで選びます。卒業生からは開業した子も出ており、同窓生の繋がりは彼女たちの心の支えにもなっているようです。

肌の白さと美しさが美人の条件である



「職業訓練センター」の入っている建物

インドネシア「小学校の教室建設」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／東ヌサ・トゥンガラ州
ナゲケオ県アエセサ地域
対象／児童186人

背景

フローレス島に位置するナゲケオ県は、住民1人当たりの年間収入が400米ドルと圧倒的に貧しい地域です。政府からの支援は少なく、経済的発展からも取り残されており、子どもたちは劣悪な環境で学んでいます。既存の教室の40%が修繕を必要しており、教室不足などが理由で中途退学を余儀なくされた子どもは、2010年だけで全体の1.6%。子どもたちは安心して勉強できず、学ぶ意欲も高まらないのが現状です。

主な活動内容

- 教室を建設(小学校2校に計6教室)
- トイレの設置(4基)
- 給水設備の設置(2カ所)
- 校舎までの舗道工事
- 教室備品の支給(机、椅子など)



今年は雨期が長く続いたため、建設工事に予想以上の時間がかかりました。同プロジェクトの対象校のひとつであるランボ小学校は、入り口までの歩道が整備されていないためにトラックが通れず、建築資材



「日本のみなさん、どうもありがとうございます！」

はすべて、200メートルに及ぶ歩道を手運びしなければなりませんでした。子どもの保護者たちから成る学校委員会のメンバーが総出で運搬を手伝ったことで、工事は無事に終わり、以後子どもたちは新しい校舎で学べるようになりました。

また、この歩道自体も泥地に石が敷き詰められているだけで、大人でも歩くのが困難なことから、プロジェクト予算と内容の見直しを行い、校舎建設に加えて子どもたちの通学のために歩道の舗装工事を行いました。

もう1校のヌルサダ小学校でも、同様に



新しい教室で学ぶ、ヌルサダ小学校の児童たち

参加者の声

クリサントさん
(ランボ小学校6年生)



「教室が新しくなってから、僕も友だちも休まないで学校に行くようになりました。学校までの道が歩きやすくなつたので、通学が前よりもずっと楽になりました」

Staff's voice
担当職員より

寺田聰子 職員
(プログラム部)



ナゲケオ事務所設立メンバーでもあるスponsaーシップ担当職員と寺田職員(左)

この訪問で、あらためてインドネシアの広さ、多様さ、そして島国ならではのアクセスの難しさを実感しました。同プロジェクトの実施地域であるナゲケオ県は、ジャカルタから遠く離れた東部フローレス島に位置します。ジャカルタからの直行便はなくバリ島やチモール島を経由するため、アクセスには時間とコストがかかります。経済発展からは取り残され、人々は貧しさの中で厳しい自然と共存しています。

フローレス島は第二次世界大戦中の日本軍の防空壕や軍用機用の飛行場が

築かれていることは、私が村を訪れた時にも強く感じることができました。

最後に、支援をしてくださった皆さんに、事務所長・ヤヤからの言葉を紹介したいと思います。
「インドネシアは日本と歴史的にもつながりが深い国です。日本からの支援は本当に貴重で、とてもありがたく、心を寄せてくださるみなさんに感謝を伝えたいです」



新校舎を建設したランボ小学校の児童たち

ブルキナファソ「中学校建設」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／南西地方イオバ県ディサン・ナカール村
対象／ナカール村の中学校に通う生徒162人
(男子109人/女子53人)、コミュニティ住民1,450人

背景

南西地方は貧困率が高く、2009～2010年に中学校へ入学した子どもは、3人に1人に過ぎませんでした。教室や教材、教師の不足に加え、貧しい家庭を支えるために家事労働に従事し、学校に通えない子どもたちが多くいます。特に女の子の多くは、中学生になると早すぎる結婚を強いられ、教育の機会を奪われてしまいます。女の子の10人に9人は中学校を卒業する前に中途退学してしまうのが現状です。

地域住民の力で継続的に学校を運営していくよう、教師と保護者による「学校運営委員会」を設立し、校内暴力の防止や子どもが安全に学べる環境づくりと、質の高い教育の提供に努めました。子どもの「教育を受ける権利」や中途退学の原因の



コミュニティ住民を対象に行われた意識啓発活動の様子

ひとつである10代の妊娠を防止する方法などについて話し合い、子どもたちの中学校就学率を改善するために保護者として果たすべき役割についての認識を深められました。元々この地域には中学校がありませんでしたが、住民たちが協力して廃墟を修繕し、校舎が建設されました。以前の状態では子どもが快適に学べる環境とはいえないでしたが、「子どもたちに学びの場を与える」という住民の思いが本プロジェクトにつながったのです。今年3月には、強風と雨で建設中の校舎が一部倒壊。工事のやり直しを余儀なくされましたが、住民たちが一丸となり無事に建設することができます。今後も地域住民が連携

し、子どもたちに質の高い中等教育を提供することが期待されます。

参加者の声

クムールさん(中学3年生)

「遠くの学校まで歩いて通っていた頃は、遅刻して授業を受けられないことも多く、成績も良くありませんでした。村にも学校はできましたが、椅子も机も十分になかったため、クラスメイトとぎゅうぎゅうに詰めて座るとなかなか勉強に集中できませんでした。村にできた新しい学校でクラスメイトと一緒に勉強できるのは、本当に嬉しいです」

ホンジュラス「老朽化した小学校の修繕」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／チョルテカ県の4町の5コミュニティ
対象／生徒1,135人、保護者と教師1,953人

背景

毎年のようにハリケーンの通り道となるホンジュラスでは、洪水や土砂災害などの被害により小学校の教室の状態もひどく、子どもたちが安心して学べる環境が整っていません。また、都市部と農村部の格差はますます広がり、本プロジェクトの実施地域であるチョルテカ県では、学校施設の不足に加え、教師の技能や保護者の理解不足による教育の質の低下も深刻な問題となっています。

「地域全体で子どもが安心して学べる環境をつくること」を目指し、プロジェクトの計画立案から実施、管理までの全プロセスにおいて、多くの住民が参加しました。まずははじめに、対象コミュニティで「プロジェクト管理委員会」を設立。プランの支援だけに頼らず、コミュニティで工事に必要な資

金を募るために署名・募金活動を行いました。教室の修繕作業にも参加するなど、地域住民が子どもたちのために積極的に協力する姿が見られました。学校設備の整備に加え、住民の意識改革を目指したワークショップやイベントも行われました。教師と保護者の代表者を集めたワークショップ

では、効果的な育児方法、子どもへの接し方、そして、子どもとの信頼関係のつくり方などについて学びあいの場がもたれました。同様に、子どもの中から代表者を募り、いじめなどを



の校内暴力の根絶を目的とした意識啓発ワークショップを実施。子どもたちは、ワークショップを通じて自分と他者の違いを認め、互いに尊重する重要性を学びました。その結果、子どもと両親の関係の改善、学校内暴力の減少、さらに子どもの出席率向上などの成果がありました。

参加者の声

ネイリンさん(12才)

「古い学校では、木板がイス代わりでした。古い教室は雨漏りがひどくとても危険で、天井から崩れ落ちてきた木片が友だちに当たりそうになつたこともあります。新しい教室が完成した時は本当に嬉しかったです。安全だし、勉強に集中することができます。教室を修繕してくれたプランと地域の人々に、本当に感謝しています」



支援者の方々に、コミュニティから感謝状が届きました

カンボジア「安全な水の供給」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／カンボンチャム州ダムベ郡と
ポンヒークレック郡
対象／約3,000人

背景

カンボジア東部のカンボンチャム州では安全な水を使える人が少なく、川や池、水たまりなどの水を飲料水や生活用水に利用しているために、腸チフスやコレラなどが蔓延し、子どもの主な死因となっています。また、水汲みは主に女性の役割とされており、特に女の子にとっては重労働であるうえに、蛇に噛まれたり、性犯罪の被害者となる危険も伴います。本プロジェクトでは、水汲み労働の軽減と地域全体の衛生向上を目指しました。

主な活動内容

- 井戸の設置(50基)
- 幼稚園のトイレ建設(38基)
- 屋外排泄廃止の意識啓発(811世帯)
- 水と衛生および井戸の建設・維持管理トレーニング(250人)
- 正しい衛生習慣を伝える冊子とバナーの作成と配布(1,000部)



毎日多くの人が、新しい井戸を利用しています



子ども対象の衛生ワークショップ

井戸の建設と、衛生に関する意識啓発が活動の中心でした。地域の人々が最も利用しやすい場所、または小さい子どもたちが通う幼稚園を選び、深井戸を建設。その後の水質調査により、砒素などは含まれていないことが確認できました。水汲みの負担が大幅に減ったことで、今後学校に通える女の子の増加が予想されます。

また、カンボンチャム州の農村開発省と協力しながら、屋外排泄禁止の大切さについて時間をかけて住民に説明したところ、財政支援がないにも関わらず、811世帯が

参加者の声

スワン・マットさん(50歳・男性)

「新しい井戸の完成をとても喜んでいます。私の村では水源が乏しく、とくに乾季になると飲み水がないので困っていました。新しい井戸の水は市場で売っている新鮮で安全な水と同じようにおいしいので、地域のみんなで感謝しています。私たちはいつもこの井戸から水を汲んで、家庭と畑で使っています」

case study

ドルさん(33歳・女性)

ドルさんの自宅にはトイレがなかったので、屋外で排泄するか、時々隣の家のトイレを使わせてもらっていました。トイレを借りるのは心苦しいことであり、引け目を感じていたそうです。ある日、プランのワークショップに参加したところ、村長が①自分のできる範囲でいいから自宅用トイレを持つこと、そして

②食事前や排泄後には石鹼を使って手洗いをする習慣をつける大切さ、といった、病気を減らすための正しい衛生習慣について説明してくれました。彼女は村長の話を聞き、自分たちもトイレを作ろうと考え、自力で家族のためのトイレを建設しました。今では家族みんなでトイレを使うことができ、手洗いも習慣化されました。

参加者の声

ポン・スレングさん(35才・女性)

「私の村では、幼稚園に井戸とトイレが新しくできました。そこで学ぶ22人の女の子を含む45人の子どもたちは、毎日石鹼を使って手洗いをしたり、水を飲めるようになりました。井戸の水量も十分です。井戸を清潔に保ち、動物の侵入を防ぐために、今度も適切な維持管理を行っていきたいと思っています」

自力で家庭用トイレを建設しました。
今後この地域の衛生活動を主導する「水・衛生委員会」メンバーには、地元NGOと協力しつつ、水を煮沸消毒する習慣や深井戸の利用徹底に関するトレーニングを実施していきます。

さらに「水・衛生委員会」の下部組織として「水利用委員会」を立ち上げ、

井戸の部品交換方法などを訓練し、可能な限り自分たちで井戸の維持管理を行う体制を整えました。今後はこの地域全体の衛生環境の改善に伴い、不衛生な水を原因とする病気の減少が期待できます。

プロジェクトには、村長をはじめとする地域の人々が積極的に参加しました。水と衛生分野の管轄省である州農村開発省や村議会と良好な関係を築き、学びながらプロジェクトを進められたことも大きな成功要因となりました。



安全な水や衛生管理の井戸の管理についてトレーニングを受ける「水・衛生委員会」のメンバーたち

エルサルバドル「衛生環境改善」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／カバー・ニヤス県センヌンテベケ市
エル・ボルカン村
対象／257人(うち子どもも117人)

背景

エルサルバドル北部のセンヌンテベケ市エル・ボルカン村には、約40年前に設置された共同水栓がありますが、老朽化が進み、十分な水量を供給できません。また、過酷な水汲みは子どもの仕事であることが多く、通学の時間を奪っています。さらに、家庭用トイレの不足や、生活用水の排水システムが整備されていないことから水源が汚染され、人々が健康を害する要因に。エル・ボルカン村での給水システムの設立は、急務となっています。

主な活動内容

- 貯水タンクの設置
- 家庭への送水・配水管の敷設(46世帯)
- 生活排水ろ過設備の設置(72世帯)
- 水を使わないバイオトイレの設置(41世帯)
- 「水管管理委員会」と「衛生委員会」の設立とトレーニング(10回)
- 正しい衛生習慣を推進するための意識啓発



送水管の工事には地域住民も積極的に参加

な役割を担いました。給水施設ができたおかげで、子どもたちの水汲み労働の負担が減ったことも大きな成果です。また、母親たちは、家庭まで引かれた安全な水で野菜や果物を洗い、子どもたちに食べさせができるようになりました。

本プロジェクトには自治体政府から建設技術の専門家3名が派遣されるなど、全面的な協力を得ることができました。さらに、給水施設の維持管理と水質管理を担う「水管・水質検査委員会」が地域住民7名で結成され、トレーニングが実施されました。今後も自治体政府と連携しながら、給水施設の水質保全と施設の維持管理を行っていきます。

貯水タンクやバイオトイレ、送水管などの建設作業に地域の大人たちも参加するなど、コミュニティが一丸となって熱心にプロジェクトを進めました。環境汚染を防ぎ、下水道システムがない地域でも活用できる家庭用バイオトイレの建設にあたっては、所得の低い女性世帯主の家庭を優先するなど、ジェンダーにも配慮しました。

地域に正しい衛生知識を普及する「衛生委員会」が立上がり、大人のほかに子どもたちもメンバーに選ばれました。衛生トレーニングを受けた子どもたちは地域の人々に紙芝居などを使って、学んだ内容を広く伝える重要性を理解しました。

完成した貯水タンク

ち上がり、大人のほかに子どもたちもメンバーに選ばれました。衛生トレーニングを受けた子どもたちは地域の人々に紙芝居などを使って、学んだ内容を広く伝える重要な役割を担いました。給水施設ができたおかげで、子どもたちの水汲み労働の負担が減ったことも大きな成果です。また、母親たちは、家庭まで引かれた安全な水で野菜や果物を洗い、子どもたちに食べさせができるようになりました。



トイレの使い方を紙芝居でレクチャーする「衛生委員会」の子どもたち

現地レポート

住民たちの数十年越しの悲願を実現。 子どもたちの成長も確認

プラン・ジャパン事務局長 佐藤活朗

の様子を見ることができました。

タンクや本管は専門業者が施工しましたが、集落近辺の送水管はプランや自治体の技術者のアドバイスを受けながら、住民たちが工事していました。完成後は使用量に応じて住民から水道料金を徴収し、施設の維持管理費にあてるとのことです。

子どもグループは村内を巡回して、衛生状態の改善を目指して新しいトイレの使い方や手洗いの意義などの教育を行っていました。ある住宅で行われた集会で多くの住民を前に堂々と説明をしていた女の子にインタビューすると、「以前は人前で話すのは苦手でしたが、この活動を通じて自信がつき積極的になりました」とのこと。子どもたちもプロジェクトに参加することで、日々成長しています。

視察後の開発委員会メンバーとの会合では、プランの支援に対する感謝とともに多くの振り返りが共有されました。あるメンバーが言った「プロジェクトをきっかけに住民間の結びつきが強まり、コミュニティが成長したことを実感しています」というコメントが、特に印象に残っています。



コミュニティから日本の支援者への感謝を込めた、記念品の絵を受け取る佐藤事務局長

ザンビア「母子保健改善」

実施期間／2012年7月～2013年9月
実施地域／ルアブラ州マンサ郡の7村
対象／妊娠婦を含む出産が可能な年齢の女性2万6,400人と乳児約1,024人

背景

ザンビアの農村地域では、近年妊娠婦死亡率は減少しているものの、10万件当たり470件と、国連ミレニアム開発目標(185件)に遠く及びません。新生児死亡も多く、その70%は農村地域で生じています。これは妊娠婦や新生児の多くが適切な母子保健サービスを受けられないことが大きな原因です。保健所では医薬品や設備、保健員の数が不足しており、彼らの知識や技能は十分ではありません。また、緊急対応が可能な病院が遠く、アクセスできないことも深刻な問題となっています。

主な活動内容

- 関係者トレーニング(63人)
- 携帯電話による救急搬送システムの構築
- 母子保健に関する知識普及冊子、トレーニングマニュアル、診療記録帳の配布
- 医薬品、医療用消費材、医療備品の支給(21保健所)
- 意識啓発



ラジオ番組の収録で、HIV/エイズ、早婚の危険性などについて意見を述べる子どもたち

各村に地域住民から成る「安全な出産支援グループ(略称SMAG、男女比1:1)」を結成。保健員から母子保健に関するトレーニングを受けたメンバーは、妊娠婦や母親、新生児のいる家庭を訪問し、安全な出産・新生児ケアに関する情報を提供する

現地レポート

アナログ、デジタル技術の融合と住民の参加が成功の秘訣

プラン・ジャパン専務理事 鶴見和雄

近年、経済成長がめざましいアフリカ大陸において、発展の成果がそれぞれの国の格差は正や雇用の創出、保健衛生の改善といった貧困撲滅に着実につ



若者たちに聞き取りを行う鶴見理事(右)



緊急時に活躍する救急自転車、Zambulance

参加者の声

ダイネス・チブイエさん (SMAGメンバー)

「これまで夫たちが妊娠婦の妻のケアをすることはほとんどなかったのですが、今では産前健診や緊急搬送の際につき添うなど、ポジティブな変化が見られるようになりました。私たちが行ってきた啓発活動が、実を結んだのです」

本プロジェクトでは、意識啓発も推進。ラジオ番組や啓発キャンペーンを通じて、地域住民の保健知識の向上を図るとともに、妊娠婦健診の遅れの危険性などについて訴えました。

以上の活動により、保健所と病院での出産率はプロジェクト前に比べてそれぞれ44%、5%増加し、妊娠婦の死亡率も低下しました。



ながっているかを検証するために、ザンビアの「母子保健改善プロジェクト」をモニタリングしました。活動地域では、プランが考案したZambulanceが大活躍していました。まさにアナログ(自転車)とデジタル技術(携帯電話)の融合ですが、多くの資金をかけなくとも、その地域に適した方法による母子保健サービスの改善が可能であることを証明したプロジェクトといえます。

ながっているかを検証するために、ザンビアの「母子保健改善プロジェクト」をモニタリングしました。

活動地域では、プランが考案したZambulanceが大活躍していました。

まさにアナログ(自転車)とデジタル技術(携帯電話)の融合ですが、多くの資金をかけなくとも、その地域に適した方法による母子保健サービスの改善が可能であることを証明したプロジェクトといえます。

また、本プロジェクトの成功要因は、ハード、ソフト面の拡充だけではなく、実は地域住民の意識改革や参加によるところが大きいのです。あるSMAGの男性メンバーによると、かつては母子保健に関する知識は全くなかったが、今ではSMAGの一員として模擬出産体験演習を企画できるようになりました。「安全な出産」に関する啓発活動を意欲的に行ってい

るそうです。子どもたちも「ラジオ若者グループ」を結成し、ジェンダーの別なくHIV/エイズや早婚問題について話し合っています。その内容は収録され、ラジオ番組としてマンサ郡を中心とした地域で放送されました。

アフリカは本当に力強い。その源泉は、みなぎる向上心にあります。今回、開発とは、やはりその心を大切に育て、実践する人づくりであると痛感いたしました。



フィリピン「保健サービス向上」

実施期間／2012年7月～2013年8月
実施地域／マスバテ州バルド郡、バラナス郡の計11村
対象／住民1万1,568人(出産が可能な年齢の女性と子どもを含む)

背景

フィリピンでは今も妊娠婦・乳幼児死亡率が高く、対象地域の妊娠婦死亡率は出産10万件あたり140件と、国平均の約1.5倍に上ります。自治体予算が限られているため保健所のない村が多く、医薬品なども不足しており、医療従事者の知識や能力も十分ではありません。このため、妊娠婦の多くは適切な健診を受けられず、伝統的助産師や家族の介助でリスクの高い自宅出産をせざるを得ない状況となっています。

バラナス郡に「村落保健連合組合」(保健局行政官、医師、住民の代表などから構成)と、その実施機関である「保健専門委員会」(保健員、保健ボランティア、薬局オーナー、住民の代表などから構成)を設立しました。そのメンバーと医療従事者を



保健所で順番を待つ母親と子どもたち

対象とした、運営管理や専門知識に関するトレーニングを実施。保健員は、妊娠婦に適切なカウンセリングを行えるようになりました。支援対象である2つの保健所は、出産が可能な年齢の女性がより多くアクセスできる地域にあります。医療専門職の介助で出産した割合も、プロジェクト実施前の65%から98%と飛躍的に増加。プロジェクトを通じて近隣の村が連携を図ることで、予算や人材が効率的に投入されるようになりました。一方で、自治体予算だけに頼らない体制作りも推進。各村からの自発的な拠出金や、医療機関受診者の利用料を財源とする「共同保健基金」を設立し、組合の運営資金として活用しています。また、地域ボランティアは貯蓄信用組



参加者の声

ガミリン・バストラさん (バラナス郡「村落保健連合組合」)

「村落保健連合組合」はメンバーそれぞれの役割が明確で、うまく機能しています。運営について多くのことを学びました。特に、予算管理における透明性はとても重要だと思いました」

実施期間／2012年7月～2013年6月
実施地域／ティラベリ州ティラベリ郡
対象／実施地域23村の住民
5万2,999人(6,242世帯)



ニジェール「穀物銀行支援」

背景

ニジェールでは、2010年、2011年の西アフリカ全体の干ばつの影響を受けて穀物収穫量が27%減少し、食糧価格が高騰しました。食糧不足と栄養不良の割合は、西アフリカ・サヘル地域全体の約40%を占めています。また、2012年には紛争が激化した隣国マリから4万人以上の難民が流入。食糧事情の悪化に拍車をかけ、特に事態が深刻なティラベリ州では、人々をさらなる困窮へと追いやっています。

「穀物銀行」とは、途上国の農業を営む人々の収入安定と食糧の安定供給を目指した機関で、いわば貯蔵庫と金融機関を兼ねたもの。人々は、収穫した穀物をこの銀行に備蓄し、穀物価格が上昇するまで待ち、適当な時期に売ることで、より良い収入を得ることができます。また、干ばつなどで食糧不足に陥った場合には、備蓄分か

ら食糧を確保します。穀物銀行は地域住民によって運営され、管理委員会メンバーの多くは家庭の食を預かる女性たちで構成されています。彼女たちは、委員会の運営管理、食糧の適切な在庫管理や販売・補充などについて学び、住民が主体となって干ばつなどのによる食糧不足に備えるための体制作りを進めています。食糧不足が深刻なティラベリでは、木の葉や栄養価の低い家畜用の穀物を食べて飢えをしのいだり、わずかな家財を売って食糧購入の足しにしている世帯も少なくありません。今回、プロジェクトを通じて原資となる備蓄用食糧が支給されたことで、地域の食糧事情が改善し、住民の栄養不良を防ぐことが期待されます。また、食糧危機問題を伝えるための広報ツールを作成。メディアや関係者と共に



有することで関心を高め、問題解決に向けた連携を強化しました。プランは、現在も農業開発省と協力して月2回各穀物銀行を巡回し、食糧の安定供給と住民の栄養改善のためのサポートを行っています。家庭で食事を作る役割を担っている女性が食糧対策の主体になっており、能力向上にもつながりました。今後も穀物銀行の設立を拡大し、女性の社会参加を進めています。

緊急支援

アフリカ3カ国「洪水支援」

実施期間／2012年8月～2013年6月
実施地域／スーダン：北コルドファン・白ナイル・アルガ・グリ活動
地域ニジェール：ドッソ活動地域に位置する7つの村
マリ：セグー地域に位置する7つの村
対象／実施地域の被災者（スーダン22万8,797人、ニジェール627世帯、マリ2,910人）

背景

2012年8月、雨季を迎えた東アフリカのスーダン、西アフリカのニジェール、マリで相次いで大規模な洪水が発生しました。家を流された人々は、厳しい避難生活を余儀なくされ、3カ国とも元々インフラや行政サービスが脆弱だったために復興には時間がかかり、避難者の衛生環境は悪化する一方でした。また、内戦により多くの国内避難民を抱えていたマリは、洪水により田畠が流され、さらなる食糧不足に陥りました。

スーダン

主な活動内容

- 保健・衛生用品の支給（2万5,713人）
- 心のケアの支援（2万5,713人 ※子ども1万617人）
- プラスチックシートの支給（1万5,000世帯）
- 仮設教室での教育の提供（3,666人）
- 地域住民への災害予防対策支援
- 下水道の修復と排水路の建設

将来の災害に備えた支援活動

本プロジェクトでは、地域住民の積極的な参加による支援活動と防災訓練に力を入れました。まず、コミュニティで「緊急支援委員会」を設立し、住民主導で被災した家族の受け入れや物資の支給を実施。パートナー団体である「スーダン赤新月社」と協力し、応急処置講習や被災地のデータ収集方法を含めた防災訓練を行いました。そして、災害時にいちばんの弱者となる子どもを保護するためのコミュニティネットワークを構築。さらに、仮設教室を設置し、子どもの学校教育が中断されないよう努めました。災害時に同世代の仲間と勉強を続けることは、子どもたちにとって精神的な支えとなります。今後は住民の力で復興支援が進められ、将来発生する災害に効率的に対応することが期待されます。

文房具を支給され、喜ぶ子どもたち



ニジェール

主な活動内容

- 蚊帳の支給（627世帯 ※2枚/世帯）
- 住居修繕費用のための現金支給（627世帯 ※約3,900円/世帯）

最も支援を必要としている人々へ

洪水により破壊された吹きさらしの住居ではマラリアに感染する危険も高まるため、蚊帳と住居の修繕を目的とした現金を支給する活動に注力しました。また、支給された現金の適切な使い方などについての指導も実施。災害時には、被災地のニーズを的確に把握し、支援を必要とする人たちに対して迅速に届けることが重要です。支援をされる人とされない人の間で争いが生まれる危険性もあります。特に、現金支給を行う際は、支援の透明性や公平性の確保が重要です。本プロジェクトでは、支援物資の確定から支給する対象者の特定までの全段階において、地域住民の参加を促しました。長年地域に根ざした活動を続けてきたプランが培ったコミュニティとの信頼関係により、公平かつ迅速な緊急支援を行うことができました。

蚊帳と現金を支給された女性たち



マリ

主な活動内容

- 食糧支給（2,910人）

複合的な危機の中での食糧支援

洪水の被害を受けたセグー地域は、マリ北部の内戦から逃れてきた人々の避難先です。もともと慢性的な干ばつに苦しむ貧しい地域であったにもかかわらず、大量的な避難民が流入したことによって地域にかかる経済的な負荷が増し、深刻な食糧不足に直面していました。内戦、干ばつ、貧困、洪水といった様々な災害が絡み合う複合的な人道危機により、多くの子どもたちが影響を受けました。被災地のニーズは多岐にわたりましたが、プランは人々の栄養不良の悪化を防ぐことが最優先と考え、食糧支援を行うことに決定。また、迅速に食糧を届けるため、外から物資を持ち込むのではなく、地元で供給可能な食糧である米を支援物資として選定しました。被災者が2ヶ月間生き延びることのできる食糧、米17.2

キロを支給し、多くの命を救いました。食糧運搬のために牛車を提供するなど、積極的な住民の協力もみられました。



市長の立会いのもと支給された食糧を運ぶ被災者たち

緊急支援

フィリピン「台風ボーファ」

実施期間／2012年12月～2013年9月
実施地域／南東部コンボステラ・パレー州、ダバオ・オリエンタル州の計7郡34村（プランの非活動地域）
対象／実施地域の被災者7万1,000人（1万4,200世帯）

背景

2012年12月、南部ミンダナオ島を襲った台風「ボーファ」は、過去100年に発生した台風の中でも最大規模で、経済的損失は約1,000億円にもなりました。620万人以上が被災し、住民1,100人が死亡。23万世帯以上の家屋が被害に遭いました。被災者は避難所生活を余儀なくされ、校舎が倒壊し、子どもたちは学校で授業を受けることができません。また、飲料水の不足や衛生環境の悪化も深刻です。

主な活動内容

- 仮設学習センター102カ所の設置（子ども4,080人） ■学用品キット支給（2万2,267人）
- 給水キットの支給（1万4,200世帯） ■キャッシュ・フォー・ワーク（瓦礫の撤去など、2,036人）
- 衛生キットの支給（女性用1万3,292世帯、乳幼児1,136人）と衛生教育（1万3,300人）
- 子どもにやさしいスペースの設置（49カ所）と心のケア（子ども3,113人）



台風の被害を受けた沿岸部

被災者の声

ロラテル・パンタヤンさん（村議会メンバー）

「浄水剤のおかげで清潔な水を飲むことができます。私たちの村を支援してくれた唯一の団体である、プランと支援者の方々に感謝しています」



プラン・スタッフによる炊き出し

安心して授乳できるスペースの設置、キャッシュ・フォー・ワーク（※）の拡大などを実施。ダバオ・オリエンタル州では、防災訓練

などの減災対策プロジェクトも開始しました。これにより、将来発生する災害の影響を最小限にとどめ、より迅速で効率的な緊急支援が行われることが期待されます。

※被災者を復興事業に雇用し、賃金を支払う方法。被災地の経済復興と被災者の自立支援を促します。

バングラデシュ「洪水」

実施期間／2012年7月～2012年12月
実施地域／北西部クリグラム県・ガイバンダ県、南東部コックスバザール県の計7地域（プランの非活動地域）
対象／被災7,000世帯（約35,000人）

背景

2012年6月下旬、バングラデシュを激しいモンスーンが襲い、北西部、南東部の計29県で河川の氾濫や浸水、土砂災害が発生。153人が死亡、住民約200万人の生活に支障をきたしました。支援地域でも51人が死亡し、58万7,501人（12万7,500世帯）が被災しています。食糧や家畜、家財、学校教材などが流されるなど、生活を搖るがす大きな被害をもたらしました。

主な活動内容

生活再建のための現金支給

プランは、国際NGOとして最初に被災地域での活動を開始しました。7日間で、被災1世帯当たり約5,000円の現金を支給。支援の重複や不正がないよう、事前にクーポンを配布。現金の支給は、政府関係

者、村議会議長、村の有力者、支援団体、メディアや警察官の監視の下、支援対象者名簿と身分証明書などの身分を確認できるものを照合した上で被災者が署名し、クーポンを使用して行いました。また、現金支



洪水で浸水した家屋

給後には、対象世帯を訪問して実際に食糧や日用品を購入したかどうかをチェック。現金が適切に使われたことを確認しました。自然災害の多いバングラデシュでは、被災後も市場は比較的早く再開されるので、被災者にとって、支援物資のセットを受け取るよりも、それぞれが必要とする食糧や日用品などを速やかに手に入れることができます。幸い被災地域の市場は洪水による影響はなかったので、住民は迅速に物資を購入することで生活を再建させられました。現金支給は支援の透明性を確保することが前提ですが、タイムリーで効率的な援助手法の一つとして認識始めています。



現金支給の順番を待つ人々

2013年度

プラン一般プロジェクト、緊急・復興支援プロジェクト収支

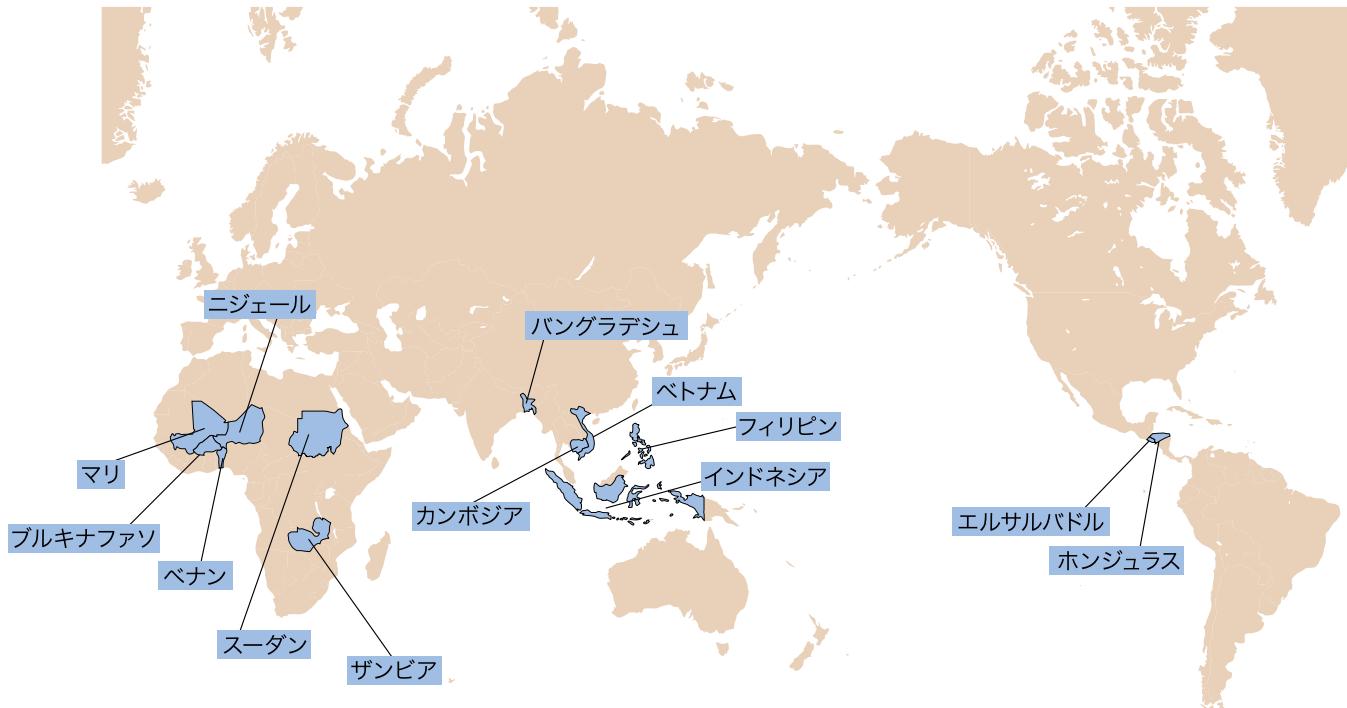
(2012年7月～2013年6月)

都度寄付件数:8,257件 Girl's Project 繼続支援者:1,685人

(単位:円)

収入	寄付金		145,727,194
	収入合計		145,727,194
支出	カテゴリー	国	プロジェクト名
	プラン一般プロジェクト	ベナン	養鶏による収入増加(Girl's Project)
		ベトナム	女性ならではの職業訓練(Girl's Project)
		インドネシア	小学校の教室建設
		ブルキナファソ	中学校建設
		ホンジュラス	老朽化した小学校の修繕
		カンボジア	安全な水の供給
		エルサルバドル	衛生環境改善
		ザンビア	母子保健改善
		フィリピン	保健サービス向上
緊急・復興支援	アフリカ (マリ・ニジェール・スークダ)	ニジェール	穀物銀行支援
		アフリカ (マリ・ニジェール・スークダ)	アフリカ3カ国洪水
		フィリピン	フィリピン台風ボーフア
	バングラデシュ	バングラデシュ	バングラデシュ洪水
	日本国内活動費用		38,014,097
	支出合計		164,913,472

当期収支差額	-19,186,278
前期繰越収支差額	31,375,688
次期繰越収支差額	12,189,410



ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン

〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル11F
TEL:03-5481-0030 FAX:03-5481-6200
www.plan-japan.org